



〈一冊の本〉

熊本日日新聞「こうのとりのゆりかご」
取材班（編）

「揺れるいのち
～赤ちゃんポストからのメッセージ」
旬報社2010年
1,500円(税抜)



「こうのとりのゆりかご」を報じ続けている、熊本日日新聞社の編集になる本である。先日、上梓されたのを一気に読んだ。筆者が学術集会長を務める「日本子ども虐待防止学会くまもと大会」が11月末にあり、メインテーマとして「ゆりかご」を取り上げていたからである。「ゆりかご」はまだ資料が少ない。図書2点、論文数点を見つけて読んだがまだまだ足りない。そこへ大会直前、市販に先駆けて寄贈していただいたので、貪るように読んだ。

新聞記事がベースであるので、わかりやすい。重いテーマではあるが、軽快に読める。記者が力を入れてこのテーマを追いつけていることもよくわかる。本書の内容は至って真つ当である。設置の経緯、慈恵病院の考え方、範となったドイツの事情、望まない妊娠の現状、子育ての困難、施設での生活の問題、特別養子縁組制度、若年者の性と生、児童相談所と、「ゆりかご」が投げかけ、明るみに出した問題を丁寧になぞっている。これだけの足で稼ぐ仕事は、報道記者以外にはできないだろう。しかし、「ゆりかご」の親子の実像を描くには、残念ながら程遠い。慈恵病院でも実際の運用情報を知るものは限られ、公的機関も同様であり、「ゆりかご」検証委員には報道との接触自粛が厳しく求められている。個人の特定につながるものがあってはならないのは言うまでもないが、公式発表だけではその実像に迫真することは難しいのであろう。記者たちの切齒扼腕の思いは想像に難くない。

さて、一般に研究者は新聞記事を軽視しがちである。しかし、現在進行形の事象での速報性と取材範囲は研究者の比ではない。もちろん、これと併走しながら、学術研究が現代社会と関わりを持ちつつ発信していく必要性もはっきりと感じ取れた。例えば虐待を受けた子どもたちのライフストーリーワークが注目を集めているが、「ゆりかごの子どもたち」の1ページ目は空白になる。子どもたちが、「自分がどうして今、ここに在るのか」を捉えなおし、周りの人々とこれを共有していくそのプロセスで最も大切な1ページ目が奪われてしまっているのだが、そのことの意味は成長、愛着、告知、アイデンティティ形成といった心理学概念と絡めて考えねばならない。報道が提起するような問題の深層構造の解明、別角度からの掘り下げ、様々な学問分野との関連づけなどは学術研究の仕事である。学術研究はどうしても一歩遅れるが、現代社会で展開する事象に振り回されることなく、かつ、無視せずに関与していく必要があると感じられた。

「ゆりかご」運用開始から3年半が過ぎた。我々の中にあつたであろう「こうのとりにステレオタイプ（決め付け）」を見直し、実績を踏まえた議論ができるようになった。言葉遊びではないが、「ゆりかご」の揺籃期は終わって、その進化を見つめていくことが大切な時期になったと思う。その際、本書や、本書の跡を継ぐ図書もきっと有用でありうると思う。（本研究所研究員 山崎史郎 教育心理学）